



愛用の情報端末「iPad（アイパッド）」で小説を読んだ。文字の大きさや縦組み横組みを変えようと、ページ番号も変わる。「どこを読んでいるのか分からない。冊子ではなく巻物。目がすぐ疲れます」

米国の読書専用端末では、傍線を引き、書き込みした本が消去されたケースも。電子書籍はアクセス権だけ。物としての本は存在しない。

年に200冊ほどのゲラを読み、カバーや表紙、扉、帯をデザイン、用紙を決める。いわば「書物の建築家」を十数年。「吉村昭歴史小説集 成」（岩波書店）の仕事に合わせ、本作りの現場を追いかけた。「重厚でしっかりした本にという注文は、めったにない機会でしたから」

本文印刷に始まり、表紙や帯など

の付物つぎもの、製箱、製本、見本納品かたははまで。「題字を箔押はくおしするための金版製作は、製本会社の下請けの仕事です。いかに多くの職人に支えられているのか、身にしみました」

その見聞をまとめた「本は物である―装丁という仕事」（新曜社）からは、師匠だった田村義也さんのこだわりなど、装丁家の先輩たちの本作りへの熱気が伝わってくる。

「これ面白いね。電子書籍で読みたい」と言う編集者がいて、絶句した。「面と向かってですよ。出版業界にも電子化オタクが多くなって」

紙の本を作るシステムが崩壊しかねない。「電子化は商売になると、人間の生理や思考への影響も分からないまま進めていいものか」